

***親子で納得

ニッポン経済学

経済ジャーナリスト・内田裕子

多様な働き方ができる社会をめざして

みなさんも、「派遣切り」という言葉を聞いたことがあると思います。不況で仕事が減ってしまうと、働き手が余ってしまいます。前の年よりも仕事が半分になってしまった会社はまだいいほうで、80%減少してしまった会社もめずらしくありません。仕事が無くなってしまったのですから、泣く泣く社員を減らさなければならなくなりました。最初に辞めさせられたのが「派遣社員」でした。これが去年末、大きな社会問題になった「派遣切り」です。

例えばA社で働いている「派遣社員」のBさんがいたとしましょう。BさんはA社にやとわれていたわけではありません。Bさんは「人材派遣会社」にやとわれて、そこからA社に派遣されてい

るのです。つまりA社には「正社員」のほかに「人材派遣会社」から派遣されてきた「派遣社員」が一緒に働いているのです。

派遣社員になる理由は単純ではありません。中小企業の正社員になるより、大企業で派遣社員として働くほうが良いと判断した人もいます。派遣社員の仕事は短期の契約が多いので、人生の時間を仕事だけにしぼられることを好まない人があえて、派遣社員を選ぶケースもあります。

しかし、いまの世の中では「派遣」という働き方そのものを悪とみなすようになってしまいました。先日も「派遣社員が増えたことが格差を大きくした」と政府が発表しました。

でも、本当にそうでしょうか。例えば芸術家を自指す学生たちは、卒業してもあまり就職はしません。多くの学生は芸術家として成功したいと願っているのです。自分の個性をいかした働き方ができる派遣制度は、彼らのような人には、好都合ということもあると思います。

年越し派遣村



去年の暮れ、東京の日比谷公園に開設された「年越し派遣村」には、仕事を失った人がつめかけました
©毎日新聞

いろいろな働き方があることは決して悪いことではありません。問題がどこにあるかという点、正社員と派遣社員が同じ仕事を同じ時間しても、給料に大きな差があることなのです。これはおかしいですね。同じ仕事をしたら、同じお金をはらうべきです。「同一労働、同一賃金」が実現できていないことが、いまの日本の大きな問題なのです。

プロフィール 玉川大学芸術学部演劇専攻卒業後、大和証券に入社。2000年に財部城一事務所に移籍。製造現場の取材や経営者のインタビューなどの仕事をこなす。テレビ出演、執筆、講演活動を通じて経済の情報を伝えている。ウェブサイトは、<http://www.takarabe-hrj.co.jp/uchida/>